

## 古墳・遺跡から読み解く「弥生時代・古墳時代の福部」

石器時代 縄文時代 弥生時代 古墳時代 飛鳥時代 奈良時代 平安時代 鎌倉時代 室町時代 江戸時代 明治時代 大正時代

弥生海退で急成長した砂丘や平野部・3000年前から500年前



縄文時代が終わり弥生時代になる頃には、海面が下がり始め（弥生海退）この頃海の開口部を徐々に塞ぎ、内海であった所は潟湖となる。

現在の砂丘地周辺では、海底に沈んでいた砂地が地表に現れて風により、激しく飛砂が生じるようになり始める。長く内海に暮らしていた縄文人は飛砂の厳しい環境を避け、細川池南域（高江・箭溪・栗谷・蔵見・海士周辺）の塩見川や箭溪川などの川で埋め立てが進む扇状地・平野へと移動したものと考えられる。

弥生時代以降は稲作などの農耕に適した平野部を求めて移動して行く。

栗谷古墳、蔵見古墳、箭溪古墳、高江古墳、海士古墳など発掘された遺跡の数や土器の技術などからして、明らかに文化の中心が海岸部から平野部へと移動したことが分かる。

弥生時代になると、稲作が行われるようになり人々の生活の場は大きく広がっていった。

しかし、縄文時代の先進地であった福部も内海というその地理的環境が稲作りに適さなかったためか、青谷上寺地遺跡のような他地域に見られるような大規模な集落の発生は見られなかったようである。

湯山池が昔「海」で、その後に砂でせき止められて「池」になった証拠は、浜湯山集落の赤丸地点を地下20m以上ボーリングした際の土壌で、地下12m付近から5mm前後の「貝化石」が発見され貝殻砂層が4m見つかった。

これらの貝は、いずれも内湾の潮間帯（海の満ち引きで陸地になったり海になったりする帯状の部分）に生息するもので、かつてこの地域には海が侵入していたことを裏付ける。

その上のシルト層\*1は水の流れが緩やかになり、シルトのような小さな粒子しか運べなくなっていることを示しており、この付近がしだいに海と隔離されてきていることを暗示している。

\*1 シルト層 シルト、あるいは日本語で沈泥（ちんでき）とは、砂より小さく粘土より粗い碎屑物のこと。地質学では、泥（粒径が1/16mm以下のもの）の中で、粘土（粒径が1/256mm以下）より粒が大きく粗いもの（粒径1/16mm - 1/256mm）をシルトと呼ぶ。

